AS6N
HQ
104
J4+
Sept. 1894
no. 398

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百九十八號

要目

朝鮮よりの來信

是れ朝鮮新報社青山好惠氏の寄する所、彼地に於ける篤志看護婦奮つて起つに至りたる顛末を細錄し、實況眼前にあり。此の美事、尤とも慶すべし、此の佳報尤とも注目す可し。

ことしの秋

ことしの秋のさびしさを叙して、無限の感慨をもらすは、社說中の第一篇なり。此外、新條約實施後の宗教及び教育に對して豫想するの一篇あり。又、覺悟の教を說く有力の一篇あり。

吉田松陰の女敎

吉田松陰、山鹿甚五左衛門を追慕して禁ぜず、其の武教全書を講じて松下塾の書生に訓す。茲に其の女教に關するものを見れば、松陰が當年の論調現然として あり、慨々乎として あり。

高橋傳五郎の絕筆

これ、千島シヤシコタンに殉死したる青年傳道者絕筆の一書、師父押川方義に寄せんとして豫かじめ認ため遺したる所のもの也。謙にして和、鬱勃として潔、彼が生平の所養を顯はして有餘。

明治二十七年九月廿二日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十八號目錄

社説
ことしの秋
覺悟の教
新條約實施後
篤志從軍看護婦

女學
日本女學の研究

家政
樂き眞の家庭(上)白衣

書架
蓮の露
見切物
支那論
老子
玩具と遊戯

開書
朝鮮より來書(青山好忠)

雜録
高橋傳五郎絶筆
言語混淆

文ならべ
吉田松陰の女訓

時報
瑞西大學女生徒の數○裁縫教授の實行◎婦人會の盟約○横濱婦人恤兵會○女生徒の義献

悲劇 魂迷、月中刄 (阿波寺鳴門左衞門)
一名、桂吾良。

女學雜誌

第三百九十八號

明治二十七年九月廿二日發兌

社説

ことしの秋

秋はものさびしきならひなるを、ことしは例になき心地するは何故ぞ。風にそよぐ枯草に殺氣あり、起伏のさまたゞごとならず。木梢がおとす落葉に鮮血あり、散りゆくさま物すごし。仲秋の月すら風流を物うしとや、黒雲の斷續、煙のわだかまるに似て、星の光り射れる丸の如く見えたり。

日くるゝ比ろ、風に動きて音たかき戸を靜かに開き、草茂る庭前に下りて、獨りつく〴〵と思へば、此秋は實に一しほものさびしき秋にてありける。

遠征の兵士、戰かひ勝ちて野陣に歸り宿する時、血に塗れたる軍服を洗ひて暫らく息こふの折り、過雁一と度び叫んで、無木の奇峯を超ゆ、目送して行く所ろを望めば、影、雲漠々の裏にかくれて餘情盡くるとなし。一軍過半ねむる、かゞり火ひとり燃ゆ、天地これ異境の天地、夢は即はち故國の夢。彼等が、秋に悼むの情限りあらんや。

此等の兵士を憶ふて、其が運命を双肩に擔ふ所ろの將軍が痛懷はいかにぞや。朝たに號令して、夕べに百千の屍を睨らみ、軍國の譽れを高めて、而して密かに思ふ所のものあり。日沒して月荒原のかなたに上る僅かに數尺、銅色、万骨の血に浮かびて、野草、赤露の重きにうなだるゝ時、勇士が所懷、豈に涙なからんや。異境の秋色、はたして慘憺たるとなきや、いかむ。

此等の兵士、此等の將軍を、韓山半島のかなたに送り、家に老親幼兒を護して、留まり守る所ろの人幾何ぞ。號外の鈴の音、無常の鐘のひゞきよりも高く、新聞紙の配達は、宣死の紙をうくるよりも胸さわがし。故舊知人の來り見舞わずして、家に人を缺くとを覺るさびしさの折、感懷乍まち彼地に飛んで、天地の風色、如何に暗澹たるや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

恭やしく惟んみれば、　大元帥陛下、廣島舊城内の假りの行宮に御して、近ごろ拂ひし草のあとを眺め玉ひ、蒼生を思ひ、遠征の民を憶ひ玉ふ毎に、大慈大悲の龍眼ときに涙にうるほはざらんや。雨これが爲めに、そぼふり、雲之が爲めにわづらひ、行宮の御座の御窓、をどろ〳〵しく、御庭の草の虫、喞々として御心を躰せんとす。此秋、ことに　陛下の爲めに悲しく、　陛下ことに此秋の爲に、御憂ひを加へ玉ふとなからずや。

嗚呼、主京、宮城の御殿の奥、階下、幾十の常の近侍、遙かに、　陛下の寶躰を思ひ奉つるごとに、いづれか無量の涙なからん。

微臣、吾等が如きもの、此等の事を思ふ毎に、感慨禁じがたし。此の秋、すなはち、秋のさびしきよりもさびし。

覺悟の教

徳川家康、油斷大敵の四字を座右の銘とす。實に、治に居るものは、亂を忘れ易く、太平に會ふものは、戰國を思ひがたし。こゝを以て、天、時々に戰亂を釀起せしめ、以て人の心を警戒す。戰に於ける攝理の妙義、この邊に存す。

左れば、レッキーは、歐洲の道德史を編述して、遂に戰の聖旨を論明し、たとひ無名不義の故によつて戰亂を生するとありとも、倘ほ以て人に獻身の覺悟を鼓吹するの益ありと言へり。况んや、名正義順の公戰に於てをや。

今や、邦家絶倫の義戰あり、吾兵數万異境に出征し、大元帥陛下亦た御馬を宮城外に出させ玉へり。此時に際しては、臣民みな大覺悟なかるべけんや、愞夫倘ほ起つべし、懶婦倘ほ走るべし。一天すべて警戒の風雲たゞよふ、吾等之を望みて豈に拘々泥々の遊惰あるべけんや。武教講錄、敬の一字を解きて曰く、

敬の字は主一無適抔と註して道學先生は高上なる事に説とも敬は乃ち備也武士道にては是を覺悟と云論語に出レ門如レ見二大賓一と云是敬を説也吳子に自レ出レ門如レ見レ敵と云是備を說く也並に皆覺悟の道なり敬備は怠の反對にて怠は即ち油斷也武士たる者は行住坐臥常に覺悟ありて油斷なき如くすへしとなり又出レ外則可レ忘レ内と云も切要の語なり山

鹿素行北條氏の宅にて赤穗謫居の命を蒙られし時北條氏より何事にても云置れ度事あらば書付られよとて硯箱を出させければ先師笑て兼てより外に出ては內を忘丈の覺悟はせし事なれば今更云置べき事迚も是れなしと對られしは實に武士道の龜鑑に非ずや凡そ武士は是程の覺悟はなくては澄ぬ事なり語類治談下に人君顧命の條あり大意謂ふ人君顧命の事周書に之を出せり然ども人の今日の言行悉く教誡なれば臨終の時と云ども別に何事をか云置ん明君賢將と暗君愚將とは平生に定まるとなれば平生の言行各其遺命なり幼主の補佐又は創業の功未た全からずして身罷り給はんには顧命の說なきにしもあらず然ども是亦人を選んで政を委任し嗣君を輔佐せしめば遺命なく共可なり、大閤秀吉の重々遺命せしも幾程なく五奉行始め各其命を用ざるに至れり是平日の敎戒疎かにして死後に敎戒せんとするとも聊か立つべき樣なし平日の綱紀亂れて死後に綱紀を正さんとする共絕て行はるべき樣なし但し死は一生の終にして人の死せんとする其言ふや善きの例しにて子孫も遺誡と號して是を守る事なれば其結要とすべき所を遺命するも一の敎道たるべきのみと是等の論實に前人未發の說にして平生に覺悟ある人に非ずんば安ぞ善く此に及んや

眞とに能く、敬德の奧秘を說明したり。此德、男女ともに必要のものたり、但だ時に臨みて修養適用の形迹を異にする耳。夫れ、亦今の時勢、かくの如し。今にして切りに此德を思ふは、尤とも的切緊要の敎たらんか。

新條約實施後

最とも至難なりと聞こえたる英國との條約改正は既に成りたり。恐らく、他の諸外國との改正締結も近きにあらん。斯の如くして、今より五年を經たらん後は、內地雜居の制度となり、諸外國の異人、吾が國民と相ひ比隣接近して住居するに至らん。

既に內地雜居とならば、外人は吾國の法律に甘從すべし。法律上の制裁は、彼等が何如なる外國の人民たるかを區別するとなし、皆な同然として之を吾國民の如くせしめん。之れ、勿論の義なり。

然れども、之によりて、外國人の氣風習慣が、全く日本的となるものと誤解すること莫れ。日本的となるにはあらず、純然たる外國的の儘なることを公許する者也。即はち、外國人が日本人となるにはあらずして、日本が世界的となる耳。日本既に世界的となる、故に外國人を包容して、其外國人たるの儘に玆に雜居安住することを許す也耳。

此故に、內地雜居後は、外國人をして日本的とならしめんが爲には、日本的なるものゝ感化力をして今より一層强大ならしめざる可らず。然らざれば、日本的なるものの勢力極めて微にして、其影響は殆んど空無ならんとす。

今ま殊更に之を言ふ所以のものは、彼の外國人と宗敎及び敎育上の事業を共同する人士の爲めに注意するの主旨のみ。彼流人士中、慢に五年後を想望して、彼時や則はち外國人は純然日本的とならんとすと信じ、密かに之を樂しむものあるを見、痛ましきに堪へず、豫かじめ其謬を指摘して、其の將來の方針を警告せんとす。

蓋し、五年後は、日本人外國人の共同事業を見ること、今の如く奇異ならじ、外國人が外國的の事業を爲すを、見るとも、亦た今の如く特殊ならじ。所云る、西洋風の宗敎及び敎育なるもの丶横行を見るとも、普通人士の眼に於ては、今の如く慷慨ならじ。之れ、日本が世界的となるの所以にして、即はち、其の國粹力を失なひ易きの所ろ。又、日本が容易すく外國風を包容するに至るの所以にして、即はち、其の國家的特性を守ることを難んずるの所ろ。正に是れ日本的の感化力を一層强大にせざる可らず、日本志士の盡力を一層猛剛にせざる可らざるの以所也。然るを何んぞ、寧ろ反つて之に安心し之に委頼せんとするをや。

篤志從軍看護婦

朝鮮に於ける我國姉妹の美なる篤志は、本號記載の開書によつて明白に知悉せらるべし。

誰か徒らに史上のナイチンゲール孃をのみ追慕することを爲す。史中の人は、つねに眼頭にあり。眼頭の人は、終に自己の我にひとし。人間そも／＼何ほどの懸隔ぞ。一とたび發奮せば、即はち聖俗一のみ。もし發奮せざれば、即はち其の懸隔や

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

霄壤よりも遠し。

赤十字社が今回に於ける計畫は、前後三年の久しきに渉らんことを豫算せり。看護者の要めらるゝこと極めて多きを推知すべし。

篤志同情の婦人、何んぞ起たざる。未だ起たざるも、何んぞ準備せざる。看護法を學ぶの事、出勞の手筈を調ふる事等、皆な其の準備にあらずや。

女學

日本女學の研究

敎育の樂しみは、敎育そのものを研究するの心篤きに隨がつて彌よ樂しきもの也。國家の事業中、敎育の如く遠大深高のものあらんや。敎育は眞とに、國家事業中の最大事業なり。されど、此の最大事業の爲めに深く研究し、其基礎根底を造り、其の要素元則を發見し、以て、此の最大事業をして、尤とも健全に、尤とも適當に成就せしむることを旨とするの一大事業は、更に尤とも樂しきものならずや。敎育者は、兵馬を指揮する將軍の如し。敎育の學理を發見するものは、參謀の如し。

然るに方今我國未だ敎育學者なるもの多からず。偶たま之れあるも、歐米の敎育學を傳へて只だ之を布延するものに過ぎず。深く日本人心發達の歷史に考がえ、其國躰政躰人情双關の心理に覺り、從來數多ありし日本の大敎育者が成敗長短の潛理をさぐり、以て眞とに好く日本に適する日本の敎育學なるものを發見したるものは、殆んど稀なり。其の未だ之れ有らざるは尙ほ可なりと雖ども、任じて此の發見に從事せんとするものゝ多からざるは、甚はだ遺憾なりとす。

日本元來特得の軍法あり、然るに近年たゞ英獨佛の軍法にのみ準據し、ひそかに志士をして所憾深からしめたるが、思ふに今回の大戰爭たる、實地の活用に際して日本軍人の特得技倆を發揮し、以て一の日本軍法なるものを見出さしむること多からんか。今の敎育上の混沌に際しても、亦た此類の望みあらん。

此類の精神によりて、吾黨は、日本の女學の發見を希望する

や久し。日本の婦人は、世界の誇りなり、其敎育に、一種の特妙あり。今や開港共通の道に順じ、天下交際の勢に依りて大ひに外形の躰式を改めざる可らざるものありと雖ども、其の內容の實素に至りては、日本の女學すでに多年の蓄積なきにあらず。此の蓄積の外に新たに西洋諸國の所長を採り、更に維新文明の時勢に適應せしめ、以て新らしき特別なる新日本の女學なるものを發明すると、極めて肝要なりとす。

今の女子敎育者中、此の抱負を以て日本の女學を研究しつゝあるもの多きや如何に。

人生の大事、熱勉の人に於ては何事か其の戰ひならざる可き。敎育者の戰は、即はち、惡習を押さへて善德を發揚するの苦戰これ也。

一事を研究し、一理を發見す。ヲポラトリーの苦心は帷幄の苦心に劣らず、其の成敗は三軍の進退よりも小さからず。哲士スペンサー切りに論ず。

家　政

樂き眞の家庭（上）

白　衣

けふを最後の勇戰、兜の中に仙香燒き籠めて夫の門出。『さらば賴むぞよ殿の上』。『隨分めざましき太刀風に、いさぎよく討死を……』いざやの一聲。見下す顏と、見上る面。

猛けき馬の嘶遠く消えたる後に、茫然たる妙齡の美人、カッパと伏して、音には泣かず。

君國の事日に非なり、今日ぞ討死と思ひ定めたる木村重成。妹脊の契も君恩の大、など惜しむべき此別れ。されば夫の、もし、心の後に引かれて……。よしや、とても此身は一足先きに三途の川、一には夫を勵まし、一には冥途の先導と、心は巖石の妻白妙。九寸の刄、不思議なる紅を染めぬ。夫に殘せし遺書は、字々血淚、至誠の跡。

大坂城中、心も花なる才子佳人、義は鐵石の堅きに比へつべし。互に思ひ思はれて、昨日は擧げし三々九度、今日は來る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

生死の別離。勇ましし、美はし、重成、白妙。此世の契は淺くとも、來世の樂み盡きせじな。樂しき家庭、嬉しき戀、神は彼等を右と左に近づけ給ひて、長く天使をして奉事せしめ給ふらん。彼等の清き名は、代々の鑑。戀の眞意は、彼等に依りて敎へられぬ。

夫なるものよ、キリストの敎會を愛し其爲めに己を捨給ひし如く、爾曹も婦を愛すべし。かれ己を捨てしは、水の洗を以て道に因りて敎會を潔め之を聖なるものとせんが爲めなり。また點汚なく、皺なく、凡て此の如き類なく、聖にして瑕なき、榮なる敎會を自ら己の前に建てん爲なり。此の如く夫その婦を己の身となして愛すべし、婦を愛するものは、己を愛する也。己が身を悪むものは曾て有ること無し、之を保養ふこと、キリストの敎會を保養ふが如し。我儕は彼が身の肢なり、彼が肉より出で、彼が骨より出でたり。是故に人は父と母とを離れて其婦に配ひ、二のもの一體になるべし。この奥義は大なり、我いふ所はキリストの敎會を指なり。爾曹も各々其婦を己の身となして愛すべし、婦も亦其夫を敬ふべし。(以弗所書第五章、二二、三三)

武士道の忠義とは何ぞ、

是れ肉につける道にあらずして、神の前の道に非ずや。國事あるの日、君の爲めに命を捨つる、破れ履よりも易きは忠臣の志なり、即ち神の愛、キリストの愛なり、敎會の愛なり。此愛を全ふするは夫婦の愛なり。此道に歩むに於て相助け相勵すは、これ夫婦の道なり。己が身を悪むものあることなし、婦を愛し、夫を愛する己が身を愛するが如くす、神の道に歩むものは最も己を愛するものなり、君の爲めに命を捨つるは最も己を愛するものなり、君の爲めに夫婦一朝處を異にして死するは、ポウロの敎ゆる所の眞の夫婦なり。神は男と女とを合せて、此愛を全ふせしめ給ふなり、夫婦の目的は爰に在り。春の惠みに養はれて、花蕾破るゝが如く、戀に依りて余等が心の頑固無味は破れて、かぐはしき香を放つなり。此かぐはしき香は、余が肉に於ける臭味を追ひ拂ひて、全身をして馨しからしめ、以て眞の愛に住ましむるに非らずや。キリストの敎會を愛し保養ふが如く、夫は婦を保養ひ、婦は夫を保養ふ、是に於て夫婦は一體にして放つ可らず。夫婦一體差別なし、婦は余なり、余は婦なり。余等は神に奉つ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

る者にして、滅ぶる肉や、朽つる黄金に奉つる者にあらず。故に夫婦は共に居り、共に食ひ、肉の身を結び付け、肉の愛を全ふするが爲の夫婦には非ずして、夫は婦の肉を捨て、婦は夫の身を去るなり。肉に奉つるもの如何で眞の夫婦の愛を知らんや、神の愛に住む者のみ、誠に高き、誠に厚き、愛戀の快樂を知るを得べきなり。

　父母の爲めには、夫婦は一體の子なり、親子は一體に非るなり。親を放れて夫婦一體になるは、夫婦一體になりて、親に孝を盡くさんが爲なり。親を愛するが爲には、夫婦は時に別るゝこともあるべし、余と彼女とは、肉に於ては夫たり婦たらざることもあるべし、命を捨てゝ親を救ふこともあるべし、是れ子の親に對する至情なり。孝子は己を捨てゝ親を保養ふなり。其如く夫婦は夫婦を捨てゝ、共に彼等の親を保養ふなり。何故に子は親を放るゝといふや、放るゝとは乖くといふの意味にはあらざるなり。余れ人の爲めに身を捨つるは、此身人より放れ居るが爲なり。世の爲に家族を捨つるは、家族は一體にして、世と相放れ居るが爲なり。放るゝといふは最も高き意味に於ける言葉にてあるなり。家族ならば兎も角もなれど、他人なるが故に、彼には懇切の禮を盡さゞる可らずとは、高き人情に非ずや。是れ最も家族を愛するが爲なり。安政大地震の時、或る武士が、其娘を殺して、其姪を救ひたる話は、余は熱き涙を以て仰ぐ處のものにあらずや。娘は己が身なり、最も愛する所のもの、姪は他の身なり、最も義を盡さゞる可らず。余に放れ居るものゝ爲には、余に近きものを捨つるは、最も樂しき、最も悲しき、最も高き、最も忍びざる人情の奥義にして、是れ即ち十字架の愛に非ずや。親に放るゝといふの意味は、實に此般の深趣を含み居ることなり。アゝ此奥義は誠に大なるかな。夫婦は一體なり、他は總て放れ居るなり、故に君父の爲めには、命だにも羽毛の輕きに比して顧みざるなり。

　最も樂しき愛は、最も近く神の前に立つものなり。夫唱へ婦和す。夫神を讃美し、愛を唱へて、婦は調を和し、韻を合す。神の前に手を握り、道の前に互にいそしみはげみ、點汚なく皺なく、キリストが教會の爲めに己を捨て給ひし愛をもて相愛し、靈の翼を比べ、靈の枝を連ぬ。霜降り、月冴へ、水凍りて、朔風羽毛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を掠め、身こゞえ、心悲しむとき、鴛鴦相抱きて、冬の地上に貴き慰を得。飈風吹き起り、世の激浪逆立つとき、彼方に別れ、此方に離れて、悲鳴の聲旻天に聞こゆ、妻はいづこ、夫は如何に、思ひ遣れば、心脆くも時に斷腸の血涙に咽ぶ。月色朦朧として浮雲定まりなく、微風喃々樹梢に耳語するの處、夫は如何に其胸に手を置くらん、强頸うなだれて復揚らず、嘆聲は深く五臟の中より出づ、妻が海棠の頰は色褪めて、眼瞼にあやしき露の珠を宿とし、綠の黒髮結ぶに物憂くして、幾條玉の唇に懸りぬ、此時悠に天地を觀し、キリストの愛を想ふとき、口邊忽ち莞爾として、眼に樂しき光を放てば、聖書を手にして慰を得るとき、心晴やかに、氣勇みて、サタンを追ひ退け、黒雲を拂ひ除き、愛と信仰の導に依りて、榮光の冠を頂き、天軍十萬身邊を守護して、絕對の平和を得ることを得ん。戀愛の神よ、余等に此生命を下して、余等をして生かしめ給ひね。

『戀せずば人の心も無からまし
もの丶哀れもこれよりぞ知る』青年の男女よ、戀は余等をして天使の如くならしむるなり。濕ひなく、角々しき巖石の如かりし余か心は、戀の苦衣を着せられしより、露したゝる綠の色を籠め、塵にそまぬ、美はしき花も飾られぬ。夏山の黒綠鬱葱として、木立のみ深き谿間の如かりし余は、其寒き泉のほとりに、白き幾輪の百合の花を咲かせて、妙なる馨を放ち、やさしき影を映してより、全世界活々として、詩の女神のほゝえみを見るが如き心地せり。索漠たりし世は麗はしき色を帶び、堅氷もて閉ぢられし池は、漣波漫々として綠の浮草面にゆるぐ。花鳥風月頓に有樣を變へ、花は優に匂ひて、鳥は樂しく吟じ、風は暖くそよぎて、月は清よく懸る。春氣駘蕩たり三月の天、紫霞の帷、青草の莚、其間に在りて、融々共に逍遙す、天は開けて、地は廣く、樹梢燃え、遠山笑ふに似たり。而して又戀が其麗はしき光を放つときは、夕暗を破りて、三五の月の東天に顯はれ、横雲の間より、次第に其面を見するが如し。氣味悪く見えし彼方の黒き塊は、振り善き松の木にてありしなり、物凄く點々せし白きものは、今を盛りの梅の花にてありしなり。怖れと惱み、疑ひと悲み、世は其涼しき光に照されて、奥床しき、趣あるものとなれり。空は澄みて深き色を染め出だし、人の顏は花の如く輝き、穢れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たるものも、なつかしき有様となりぬ。熱からず、寒からず、固ならず、漫ならず、玉兎中天に懸りて、余も塵の世をや放るらん。此時初めて戀知らぬ男は、玉の盃の底無きが如しといふの意を覺るを得ん。此光景は冷血漢の到底想像だも及ばざる所、野望あるもの、決して窺ふ能はざる宮殿なり。天地の詩趣は此時に於て理會され、戀の使命は此時に於て遂げられん。然れども此詩趣は、如何なる點に余を立て、此使命は、如何なる方に傳へらるゝか。余は是を誤用せざらんを要し、余は岐路に迷はざらんを要するなり。新酒に醉ふて、玉山倒れ、戀に迷ふて、却て亡に赴くものあり。

　國家の安危に關する大戰爭は

秀頼の時のみに非ず、大坂城中のみに非るなり。劇しき戰は余等大平の御代に在り、戀人と手を握るの間に於てあるを知らずや。戀の中に在るものは最も大なる敵を、前に引受け居るなり。其敵は獅子身中の虫、余等自身の中に在るなり。戀は夏の樹木の如く、其柔かなる枝をひろげ、緑なる葉を茂らして、涼しき影もて旅人を憩はしめんとすれど、燃くる太陽は火の焔を下し、土は裂け、風は死して、木葉凋み、清水涸るゝが如く、感情の焔、心の空に威を逞て、余等をして狂はしめ、腐らしめ、滅びの道に奔らしむ。蛇覆盆子を認めて、眞の覆盆子とし、毒ある茸を取りて、香ばしき茸となす、其毒は身を苦め、腸をきれ〴〵に裂きて、余等を責む。一日見ざれば千秋の如く、共に棲まざれば、戀の破れたらん如き心地して、神を放れて獨り苦悶するなり。春風春雨能く花を咲かせ、春雨春風能く花を散して泥に委す。牛は其主人を知り、馬は其飼はれたる厩を忘れず、犬は夜もすがら主の門邊を守る、然るに余等は、美しき此恵を受けたる恩を忘れ、穢して食ふ可らざるものとなし、蹈躙りて用ゆ可らざるものとせり。心の國は頽れ、智識の邑々は火に包まれ、信仰の大地は、大震振ふ、目は盲し、耳は聾し、暴れたる猪の如く狂ひて、田畑を荒し、猿の如き愚をもて、水に映れる月を捕らんとて溺る。無學のものよ、狂へるものよ。

　甞て抱ける剛毅は挫け、忍耐は失せ、

心浮き立ちて夏の夕の雲の如く、氣は散じて波に漂ふ水藻に似たり。國を忘れ、家を忘れ、人間を忘れて、戀てふ熱病に不思議なる囈語を放つなり。德義も忘れ、慈愛も忘れ、正理

さも忘れて、愛てふ毒藥に恐ろしき魔睡を來すなり。戀は最も戒め、最も謹まざる可らざるなり。

他の喜を得んとて、殊更に笑を裝ふを止めしめよ。他の心に在る穢を認めて、言ふを憚るを止めしめよ。他が過あるとき、其機嫌悪きに恐れて諫を扣ゆるを止めしめよ。他を愛するが爲めに、慣れたる馴言をいふを止めしめよ。他と樂を同ふせんが爲めに、大切なる務を怠るを止めしめよ。願はくは余等をして、女といふものを思はざらしめよ、男といふものを思はざらしめよ。此神聖なる惠を、唯一の敬虔を以て、神より拜受せしめよ。神の攝理の兩性の間に成るを俟たしめよ、戀を捨てざれば戀は得られざらん。物を索むらん如く、戀を求むるものは哀むべきかな。かゝる戀は夫れ自身生命を殺す劔にてあるなり。

重友者交時極難、
輕友者交時極易。
千歲畫圖山裏色、
四時歌曲鳥聲中。

書架

○蓮の露

蓮糸閑人

忍月居士、文壇久濶の情あり。今ま、其近作の小說を讀めば坐ろに其が精緻敏慧の批評に對較して、一入憾惜する所ろのもの多し。第一、日本の現在、かゝる女俳優あり得べからずと思はしむるの前提を消す能はずして、徹頭徹尾、つくり物語りの感あらしむるもの、最大の損失なり。たとひ何如なる小說なりとも、既に小說たるものには、其事實の全くは在り得べからざるものなれども、讀來り讀去る間だ、讀者をして髣髴として現境に在るヿを感覺せしむるは、即はち、撰材と着筆との伎倆にあらずや。然るに此書の作者は、未だ其の着筆の伎倆を問はれざるの前、既に先づ撰材に誤まりありたるヿを顯はせり。

惜しひ哉、主人公、女主人公、共に性狀の特格を存せず。特に彼の忠篤露骨にてあるべき義俠老僕を寫すに於て、甚はだ

しき拙劣を示せると、重ね〳〵殘念なれ。

惟ふに、此小說は、居士が田舍の讀者に讀ませんとて作りしものなるべし。もとより一夜づくりのものなるべし。但だ居士を重んずるによつて敢て此評を爲す耳。

○見切物

三種の作、三様の觀察と、三昧の文章とを示めす。正太夫子亦た多能と云ふべし。輕々く罵しつて天來斬新の驚ろきを與ふるもの、當世、君の如きものは尠なし。

○支那論

竹越君、流麗雅潔の筆を揮つて、一瀉千里の文を行る。間ま堂々として大政治家の識見を示めす。戰后の要償に臺灣島を割かしめんとするの策、日露佛三國同盟を造るの策、ともに志士の猛省を促がす。

○老子

哲學雜誌のG.K.氏は何人ぞ。老子の傳を作りて稍や卓犖の見あり。俗論と異なりて、警拔の識、燦めくものあるによりて、ひそかに後段の續出するをまつ。云く、

必竟、老子は行爲の外にあらはれたるものを正さんとせずして、其行爲の出る源頭を清めんとせるもの也、外を飾せずして內を修めんとせるもの也。

老子は無形無跡無極にして大極なる道を取て天地万物の主宰となし人間行爲の標準は玆にありと定めたり。

老子は斯く仁義忠孝を叱するも、決して是を絕對的に非とするものにあらず、たゞ之を第一として自から行ひ、他を律するを非とするもの也。

○玩具と遊戲

家庭叢書の第三卷とす。玩具及び遊戲を八種に分ちたるが、審美的のもの、職業的のもの、安全的のものなどを說く所ろ甚はだ少なし。家庭の和樂、夏の家庭などに比べては、稍や專門上の事なれば、敎說一層、明白信切ならんことを望むものも多かるべきに、此の卷は少しく不出來なりとす。但し思ひ付の巧みにして、編輯の味はひ多きこと、例によりて特色あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

開書

朝鮮より來書

謹んで一書を女學雜誌主筆巖本善治先生の机下に呈し申候、御承知の通り當地は戰爭騷ぎにて大混雜の際にて寸暇だに無之、爲めに久しく女學雜誌に通信するの榮を得ざりし處今回は如何なる多忙の中をも冒して是非御報せざる可らざる悅ぶべき事柄に出會ひ申候。

今回の事變起り纔ひで海陸に戰爭始まりて以來仁川京城等に在住せる日本國民が只「國家の爲め」なる感念を以て身を棄てて働き居るの狀況は日本より新に渡來する者の感嘆して措かざる所に候處今や單に男子に限らず婦女子に至る迄一般に敵愾心を制し切れず奮ひ立ちて國の爲めに働かんとするもの續續出で來る樣に相成申候左の十女子の如きは蓋し其最なるものに有之候。

佐藤ひさ（居留民總代佐藤一景氏の令室）、兒島はま（仁川公立病院長兒島修吉氏令室）、高橋れん（第一銀行仁川支店員高橋敬太郞氏令室）、河原ひさ、平梅よし、平川つち、三井たか、內山いし、田原すえ、下田ふじ、

以上は此土地に於て大抵上等の位地に在る人々にて平素大率下女下男を使役し不自由なき人なるも各地の野戰病院に於ける負傷兵病兵看護の法凡べて看護卒に一任しあるが故に往々患者の苦痛不便利を感ずること多きを聞き氣の毒に思ふの義氣禁ぜず一身上の愉快と幸福とを打捨て、戰爭中は如何なる場所にも踏み込みて負傷者病者の看護を引受けて之れに當らんと決心し以上十人の同志申合はせ遂に左の如き願書を仁川日本領事を經て龍山の旅團本部に差出したり。

今回の事件に付き我帝國軍隊中負傷者又は病氣等有之候節は野戰病院又は赤十字病院に於て夫々看護治療相成候事と奉存候へ共海外異域の地自然看護の御不便も可有之哉と奉恐察候就ては私共此際聊か聖恩の萬一に奉報度纖弱不肖の身を顧みず看護婦志願致度候に付き微意御賢察の上御採納相成候樣御取計被下度此段謹で奉願候

明治廿七年八月一日

宮城縣仙臺市上杉山通十九番地平民、仁川日本居留地居留
佐藤ひさ（萬延元年十一月生）

秋田縣秋田市保戶野表諏訪町一番地士族、仁川日本居留地居留
高橋れん（明治三年三月生）

岡山縣兒島郡日比村大字和田三百二十六番地平民、仁川日本居留地居留
兒島はま（慶應元年十一月生）

（以下七名姓名略す）

然るに當時龍山に於る旅團本部を師團本部に編制し換ゆるとに付き同地は大混雑の際なりしが故其筋に於ては暫く許可し難き旨の達しありしが右の篤志婦人諸子は一旦思ひ立ちし事に付き飽く迄も志望を達し度くと思ひ更に左の通りの願書を差出申候。

御願　　　私共儀

曩きに黴軀を顧みず看護婦出願仕候處當港に於て看護必要の時期可相待旨懇々御諭示之段謹んで奉拜承候妾等素とより勞苦艱難は覺悟の事にして如何樣に召使被成下候共聊かも厭ふ處に無之依て寸時たりとも護國の爲め負傷疾病に苦められつゝある軍人諸氏に看護に從事致度衷情難止より茲に重ねて御賢察を煩はし候間何卒特別の御詮議を以て願意御許容被成下候樣御取計被下度候伏而奉願候也。

陸軍將校諸氏も深く諸子の義氣に感じ去る八月廿日旅團長大島少將より右十名の內有夫の婦人七名即ち兒島、佐藤、高橋河原、三井、內山、下田の諸子を撰拔して其願を許されしかば一同悅び勇みて支度を整へ廿四日滊船漢陽號に投じて龍山津に赴きたるに付き居留民は擧げて諸子の行を壯とし何れも之れを埠頭に見送り申候。

諸子は翌日を以て無事漢江々畔の龍山津に着し同日より萬里倉の兵站病院に入り看護に從事することとなれりしが病院とは云ふものゝ今にも戰場に化するも知れず萬里倉の事とて只形ばかりの屋舍を作り用ひたるに過ぎず食事の如きも軍中の事故只餓えぬと云ふ迄の粗食加ふるに朝は暗き內より夜は十時過迄小休みなき働き此れ迄安樂なる生活をなし居りし諸子の身には中々に困難の業なるべきも唯國の爲めと云ふ一念に凝り固まりし諸子に於ては何程の事とも感ぜず眞心を盡くし叮嚀親切に看護に從事せらるゝより同病院に在る士官兵士等の患者諸氏には皆泣ひて諸子の高義を謝し何れも病癒ゆるの後には此れ等篤志婦人諸子の忠義に對しても一と廉の功を成して死せざる可らずと語り居り候其他士官兵卒の是れ等篤志婦人の義擧を聞くもの皆感奮激勵せざるものは無之候。

諸子の此の義擧は第五師團兵站軍醫部長小池正直氏より在大本營石黑野戰衞生長官へ上申せられたるに石黑長官は更に皇后宮太夫を經て

皇后宮陛下の御叡聞に入れ奉りし由にて左の如く通知あり。

仁川港居留

下田龜太郎母　下田ふじ
河原治平妻　河原あさ
兒島修吉妻　兒島はま
高橋敬太郎妻　高橋れん
佐藤一景妻　佐藤ひさ

右の者儀病院看護に從事志願の段領事舘を經て願出候趣了承仕候右病院へ使用の義差支無之候尤も萬里異郷殊に此事變の際に當りて如此願出候は憂國の至情より出候義に付き此段小官より姓名書を作り皇后宮大夫を以て皇后陛下へ申上置候也

明治廿七年八月

野戰衛生長官　石黒忠悳

第五師團軍醫部長小池正直殿

右は小池軍醫長より篤志看護婦諸子に達せられたるに一同之が爲めに益々奮ひ立ち日夜其務めに勵精し居ると云ふ左の一書は前記せる某夫人が仁川なる其良人に送り來りし書簡の略に有之候。

（前畧）兼て御約束申候處着早々書面差出すべくと心懸居候へ共毎日朝飯前より夜遅く迄看護に從事致し退室後も今日迄は何かと混雜且つ重病人ある隣室に住み居候事故深更迄起き居候に付此れ等の患者の方々に如何やと遠慮致候に付き遂ひ延引に相成り誠に申譯も無之候

目下在院患者は負傷者病者三百名有之候病室は藁葺の小屋にて一番室より五番室迄外に隔離室、屍室、藥局、賄室、浴湯室、消毒室、兵站軍醫部看護婦室等有之候看護婦室は態々我々の爲め新築せられ候室にて一昨日落成に相成今日引移り申候

此程より患者相增し室内混雜に付又々五棟程新築致候先日朝鮮人も一名入院致候、我々には流行病室へは一切出入を禁ぜられ候に付き其邊は御心配被下間敷樣願上候、私共は小池病院長、中村取締大井藥局長等其他より非常に叮嚀なる待遇を受け誠に御氣の毒に存候併し是に付けても一層注意して務めに服し國恩に報ひ度くと心掛居候

追々大合戰有之候由にて兵隊並に軍醫看護人等追々戰場へ向ひ候右に付病院の都合も有之候に付き全快の見込なき者は大概御地の病院へ送り候樣相成り候

私共日々多忙にて晝飯は大概二時三時頃に相成申候日々の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

運動と時間後れにて三飯共相進み麁末なる賄ひにても一向嫌ひなく何時も大食致し候
私共は看護服各一枚づゝ相渡り候（肩に十字の印を付け）小池氏から他日一同此服にて寫眞取るべくとの話是有候佐藤姉は私共特志看護婦一同の取締を命ぜられ候（下畧）
以上事實を其儘に御報申上候。

九月三日　仁川朝鮮新報社　青山好惠

雜錄

高橋傳五郎絶筆

千島シヤシコタンの越冬中慘死したる高橋傳五郎氏は、其机上に押川方義氏に寄する一書を遺し置たり。封簡の日付は、十月廿三日認とあり、其の日記及び此文中の主旨より推すに、九名の同住者中、五名の行方不分明となりたる時、之を搜索せんが爲めに險を冒して海上に出でんとする時、則はち万一を期して認ため遺したるもの丶如し。文に云く、

愛する師父よ吾無人の島に八名の探撿者に伴ふて此に在り夙夜未だ嘗て主の命を忘れず己れの如く今左右にある兄弟を愛せんとし其愛日に加はるを自ら疑はず吾學淺く識足らざるは師父が熟知し玉ふ所なり即ち又說敎の人を導くあるに足らざるも特に吾に許容し玉ふ所なり而かも吾は主に在りて師父を大概顯せり是れ聊か誇るあらんとする所なり而して吾が傳道の結果必ず擧るあるべしと信ずる所なり吾常に祈て曰ふ此兄弟を愛し之を愛して己れの如くならしめ賜ひ願くは彼等の罪を免し賜へ彼等の罪の爲めに此僕を鞭ち賜へ彼等の罪の免されん爲めには吾生命を捨つるも可なり唯御心のまゝに爲し賜へと而して出來得る丈けは此祈りの幾分を實行しつゝあるなり

明治二十六年十月九日月曜日報効義會員堀江彪（高知）中村重吉（福岡）木村佐吉（神奈川）鶴島久次郎（島根）島村金一（島根）の五名越年探撿島シヤシコタンよりトヾ取の爲め對岸なるエカルマ島に小舟を艤して發す米二斗と味噌少許、銃四挺此丸凡六十發等を供へ又毛布一人前凡三枚嗚呼我等此遠征者の歸るを待つと茲に十五日其間尤も海荒くして舟

のエカルマを發す能はざるの日ありと雖も靜穩の日亦少からず而して今尙歸らず其れ或は變あらんか吾於是乎是れを見舞んと欲す尤も一間半計のボート一隻あり然かも之れはエカルマに行くに任へず任へざるも同意者あれは行くべきも如何にせん經驗あるの人此舟は遠きに用ゆべからずと且つ强て人を伴ふも亦此人を死なしむるとのあるありては吾れに人を殺すの罪あるなり吾に生命あり主に在りて生くるもの量盡し富岳の重きあり(師父よ吾慢なるか願くは宥せ)然れども常々此兄弟の爲めには生命をも與へんと思ひ居る折柄今は是れ毛よりも輕き吾生命なり吁吾彼の五名を探らん主は死せるものをして死せるものを葬らせよと仰せられたるを信知す而かも吾をして彼五名を探らせんとの心を持たしめたるものは主也盡し知る吾は死ぬるものなり吁又何ぞ疑はん。

言語混淆

通常我國に於て使用する言葉に、外國語の混じて日本化したるものを聞くと尠なからず、近頃ろ、其の例證として幾干を擧げたるものの曰く、

ペンキ	*Penki*	Paint	ペイント
フラフ	*Furafu*	Flag	フラッグ
ソップ又ソウプ	*Soppu* or *Sōpu*	Soup	スウプ
ハニス又ニス	*Hanisu* or *Nisu*	Varnish	ヴアーニッシ
メリキ又ミルク	*Meriki* or *Miruku*	Milk	ミルク
ステンシヨン又ステーシヨン	*Sutenshion* or *Sutéshion*	Station	ステーシヨン
ストンボチ	*Stonpochi*	Steamboat	ステームボート
コーター	*Kōta*	Coal-tar	コールタア
ペン	*Pen*	Pin	ピン
ホコ又ホッコ	*Hoko* or *Hokko*	Fork	フホーク
スポン	*Supon*	Spoon	スプーン
ハンケツ又ハンカチ	*Hankechi* or *Hankachi*	Handkerchief	ハンカチーフ
ポケツ又ホケツ	*Poketsu* or *Hoketsu*	Pocket	ポッケット
ビステキ又ビフテキ	*Bisuteki* or *Bifuteki*	Beefsteak	ビーフステーク
キヤベツ	*Kiyabetsu*	Cabbage	キヤツベヂ
サンパン又シヤンパン	*Saman* or *Shampan*	Champagne	シヤムペーン
テリグラフ	*Terigurafu*	Telegraph	テリグラフ
フランケツト	*Furanketto*	Blanket	ブランケツト
コンデンス	*Kondensu*	Condensed	コンデンスド
マドロス	*Madorosu*	*Matrose*, "sailor"	マトロス
メリケン	*Meriken*	America; American	アメリカ、アメリカン

文しらべ

吉田松陰の女訓

吉田松陰、幼けなくして家學を修む、家學とは山鹿流の兵學なり。こゝを以て、松陰つねに山鹿素行をよびて先師とし、追慕禁ずるとなし。素行は、即はち山鹿甚五左衛門の事にて、万治寛文の頃ほひ、一處士の身を以て天下を聳動す。后ち赤穗に謫居して子弟を訓陶し、異日四十七士をして起たしめたる原動力潜む所ろの英傑なり。松陰、素行の武教全書を講ずるの末、遂に婦女子の道に及ぶものあり。左は即はちこれ也。

女子の教戒の事、先師（山鹿甚五左衛門）の深意、尤も味ふべし。夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由て生ずる所なれば、一家盛衰治亂の界、全く玆にあり。故に先づ女子を教戒せずんばあるべからず。男子、何程剛腸にして、武士道を守るとも、婦人、道を失ふ時は、一家治らず子孫の教戒、亦廢絕するに至る、豈愼まざるべけんや。而して輓近、女子の教戒を以て重事とする者あるとを聞かず。蓋し女教、大畧三種あり。先づ源氏物語、伊勢物語等の俗書、淫泆の事を以て教とする、是先師の深く嘆ずる所にて、教とするに足らず。然ども此類、只今にて貴人大家には或はあらん、平士以下にては甚だ少なし。但し和歌、俳諧、茶湯等の游藝を以て娛みとする者は間々是あり、是亦其類なり。又貝原氏の書、或は心學者流の書等を以て教とするあり。是尤も正しく尤も善し。然れども柔順、幽閑、清苦、儉素の教はあれども、節烈、果斷の訓に乏し。太平無事の時は、是にて餘りあれども變故の際に、貞操峻節を勵すに至ては未た足れりとせず。獨り先師の教へ以柔順爲用、以果斷爲制と云者、兩ながら全しと云べし。又、爲士之妻室者士常在朝而不知內故代夫戒家業豈以懦弱乎と云は、實に至言なり。且、漢唐之間守義死節之女、皇國武將之妻室以盛衰不改節以存亡不易心或當賊或死敵を以て證とす、其意更に明なり。漢唐と云は註に據れば、列女傳（蓋し劉子政の著す所を云。）小學（宋朱文公の著す所。）等に載する所を斥すと見へたり。列女傳は余未だ本書を見ず。小學にては漢の陳孝婦、曹文叔妻、唐鄭義宗妻、奉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天寶氏二女等也、就て見るべし。又、後漢書列女傳に載する皇甫規妻、董卓を罵りて、節に車下に死し、樂羊子妻、盜を拒み姑に代りて刎頸して死するの其他、倘苦節、烈行甚彰し又、明淸間の史集を閱するに、貞婦烈女極て多し。皇國武將の妻室と云は、武田勝賴の妻北條氏、細川忠興の妻明智氏、柴田勝家の妻織田氏信長の妹にて初め淺井長政に嫁す長政の亡ふる時殉死せずして大歸すれば其節已に闕く唯勝家に殉死するの一節取ろべし蒲生氏郷の妻明智氏などの類を指すにや。其外、結城親光、楠正成、菊池寂阿等の妻、義朝、義經等の妾常盤三子の爲めに淸盛に從ひしは尙辭あり然ども寵衰ろに及んで出て、人に嫁するは何事ぞや然ども其心亦人に過たる者ありの類古今枚擧に暇あらず、願くば和漢古今に亘り、此種の人を妙選し、雄勁明暢の筆を倩て、國語を以て其傳を綴り、頗る是に論斷を加へ以て女子の龜鑑とせば、甚美擧と云べし。前に引く所の列女傳、小學等、漢文にて女子の講讀に便ならず、皇國婦女の事、責而草に列女の傳あるを見る、甚善し。但收むる所の人數、甚寡きを恨む。近日人あり本朝女鑑の闕本を示す、其躰裁先づ吾心を得たり。但其中、光明 皇后等の事を載す、余甚だ喜ばず。然ども其外收むる所は、皆女子の鑑とすべき者なり。余從來此事に心ありと云ども、未だ多く此種の書を捜索する

に暇あらず。思ふに其撰、其文並に吾心を獲たる者ありて未だ見るに及ばざるともあるべし。抑古語に忠臣不レ事ニ二君一烈女不レ更ニ二夫一と對して云ふ其意、極て深し。上に云ふ後漢書列女傳中、曹世叔妻の傳に女誡七篇を載す、極て善し。其中に烈女の義を論じて曰く、禮夫有ニ再娶之義一婦無ニ二適之文一、又曰く、得意一人是謂ニ永畢一失意一人是謂ニ永訖一と。蓋し婦人夫を以て天とし、一適して改めず猶人臣の君に事ると異るとなし。今の俗、猶能く婚禮には檳榔樹の上張かちんの上下を着く。婦人已に嫁すれば歯に塗るに鐵漿を以てす。皆其意、深黑不變の色に象り一適不改の義を取るとなり。然ども今世、淫佚の婦は往々聞くとあれ共、貞烈の婦に至ては寥々乎として響を絶す。然れば禮儀、聊其舊を存すと雖も其義は已に泯沒せり。余常に竊かに是を過憂して亂亡の先兆とす。何となれば物各類あり、故に忠臣を求むるは孝子の門に於てすと云へり。節も亦忠孝の類に非ずや。然れば今世、貞烈の婦に乏しき所以は、父兄の敎誡至らざるなり。父兄の敎誡至らざる所以は、其自ら君父に事ふる忠孝の心なければ也。今時平に國安ければ宴安に其日を送り、祿を辭し官を罷て、去て他邦

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に往く者あるとなし。然ども是を以て遽に其二君に事ざるの忠心を信ずるに足らんや。滔々たる父兄、要するに皆、其忠心なし。故に兒女、其敎誡を聞かず。兒女、其敎誡を聞かず、故に人の妻となりて貞烈の節顯はれず。人の母となりて其子を敎誡するとを知らず。是父兄女孫、矇昧にして無敎誡の世界に生死す。是に於てか烈女なく、忠臣なし。今日、二三夫、四五夫を更て耻ざるの子孫は異日必ず、二三君、四五君に事て計を得たりとするの臣僕なり。歐陽公、王凝が妻の事を引て馮道を議す、其深意、亦推して知るべし。有志の士、念を起して玆に至らば安ぞ惻然惕然、女子の敎誡に眷々せざるとを得んや。有志の士、眞に今の弊を救んとならば、先其妻、其女を敎戒するに前に云ふ古列女の事蹟を以てし殊更、叮嚀に二夫を更ざるの大義を敎誡し置き其于歸に臨では、又此義を掲示して且夫家、萬々居るに堪ざるの事あらば、自盡するの外、天地間別道あるとなきを敎誡すべし。若し敢て親家に大歸する者あらば忍びざるとなれども、父兄逼て自盡さすべし。是程の事なれば最初擇壻の時も勿論苟且なるとなかるべし。又其女子にさへ角く大義を責る程の父兄其君に事るの忠、最も甲斐〱敷事共也。唯有志の士、深察遠思せよ。

時報

◎學校、

○瑞西大學女生徒の數　現今瑞西の六大學に於ける女生徒の總數は三百六十六人にして大學生徒總數の一割二分を占むるに至れり而して三百六十六人の女生徒中露國人は百九十一人の多きを有し瑞西人及獨逸人は各五十三人にして其他は諸國人なりとす故に女生徒總數の六割九分は露國人に屬す但し露國の女生徒百九十一人中百三十二人は醫學、五十五人は哲學、四人は法學を研修すと云ふ

○裁縫教授の實行　高知市内に於ける各尋常小學校三四兩級女生へ去る六日より裁縫教授を實行したる由

◎義献、

○婦人會の盟約　第二師團將校の夫人妻女を以て組織せる婦人會は此程偕行社樓上に於て臨時總會を開き同師團にして出兵するあるも決して未練の擧動をなさず出兵の後は貞淑と節儉とを守り且つ其子女を教育して只管戰勝を祈るべし又戰地の景況は時々婦人會より報告して各自の安否を知らしむべし若し戰死等の事ありては官より恩給は賜はるべきも經濟上不足を告ぐるか又たは疾病患難不時の災厄に罹る等の事ある時は會員共同して之れが供給を補助すべし決して貞淑の義を欠き子女の教育を怠り共力懇親の誼を疎かにし軍人の妻たる名譽を辱かしむるが如きことあるべからずとの事を堅く盟約したりと

○橫濱婦人恤兵會　橫濱にては既に恤兵會ありて其の募集金一万圓以上に達し兵員の家族を扶助し居れるが尚ほ大谷嘉兵衞、原善三郎、中野健明等諸氏の夫人主唱者となり橫濱婦人恤兵會を組織せんとの相談あり不日知事の官邸に於て集會し恤兵金募集の方法を協議決定する筈なりと

○長岡婦人救護團　征淸兵士のため衞生的被服を寄贈するの主旨を以て今回舊長岡藩主牧野子爵の萱堂常子を始めとし醫學士高畑挺三氏夫人幸子、軍醫郷野直氏夫人保子、長岡病院看護中原琴子諸子發企にて長岡夫人救護團なるものを設立し同感婦人中の義金を募る事となりたる由なるが右事務は鈴木義延、多田俊造兩氏に委託したれば長岡病院中に於て取扱ふと

○女生徒の義献　高知市なる高知高等女學校にては豫て校長より生徒に對し父兄より貰ひ受けたる紙筆墨料の中にて其の幾分を餘して貯へある者は此の際献金して然るべしとの事を諭されしに此の程生徒より醵して武揚協會へ寄託に及びたる義金は二圓八十六錢ありしと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

宮城。いや、あればかりは貞節なのだらうよ。
山口。なァに、あなた、そんなにおとぼけなさらんでも？
宮城。何にャァとぼける？
山口。えへゝ、わたくしは遠からよく存じて居りますぞ。
宮城。何にを存じて居るか、さッぱりわからん。
山口。あなたはあの上田を……
宮城。こゑが高い。
山口。はい。［あたりを見まはす。］
宮城。實は、きみ、あれを欲しかッたんじゃて、いまの妻はもうひまをやるつもりだから、何にもこれがめかけにしやうといふのでャァないし。
山口。いよ〳〵白状なさッたか？
宮城。しかし、承知してくれなけれャァ仕かたが無い。
山口。なァに、それには、承知さす手段をつくせばいゝでせう？
宮城。手段といッてさ？
山口。なァに、たゞ一とつです、
宮城。何にも、さうりきまんでもよからう？
山口。はゝゝ、りきみはしませんが、どうです、一方を追ひのけてャァ？
宮城。それャァ桂を免職さすは易すいが。
山口。わたくしはそれがいち番手ぢかゝとおもひます。第一、桂が居ては、われ〳〵軍醫の躰面をけがします。
宮城。もち論、そのとさ。何にも、をんな日照りでもあればこそ、立派によめにしやうといふものァ、上田ばかりでャァあるまいし。
山口。さうですとも、あとを慕たッて行けャァ、それャァ、もう、仕かたありません。
宮城。何んしろ、病院の躰面に關するとは、根から絶ッてしまはんけれャァいかん。
山口。しかも、桂にャァ、いと子でいひ名づけがあるんです。
宮城。それャァ、森子爵のむすめだらう。
山口。さうですとも。
宮城。若し、院長などゝ相談のうへ、免職にでもなれャァ、つまり、その叔父のところい引き取られるのさ。
山口。さうなれば、なほ都合がいゝでせう？
宮城。どうだか？しかし、桂は無念だらう。實はね、いち度涙子にほのめかして見たんだが、聽きさうも無いんじゃて。
山口。今度はきびしく出たら、いゝでせう。―いや、へたな長談議をいたしました、もう、御免被ふります。
宮城。まァ、はなせばいゝ。何にも無いが、一杯やらう。
山口。はい、ありがたう。それでは、ちョッと御免を。［山口入る、宮城は呼びりんをならす。奥より書生。］
宮城。酒の用意をいひつけてくれ。
書生。はい。［はいる。］
宮城。［ひとり］どうか、うまく行けばいゝが。―聽かねャァ、おのれ、あたら花を散らすは惜いが、こゝに癩病になるくすりがあるぞ。いかな桂だッて、くづれた上は惚れて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も居まい。—にッくい涙子！聽かねェ、ざま見ろ！こじきにでもなり果て、ちんば手無しに抱かれて、— それが何により［木のかしら］本望であらう。

［道具廻はる。］

(二)看護婦雪子部屋の場。

［本舞臺、病院看護婦部屋の體。溢屋雪子、ランプのもと、小机にもたれて、おもひ入れ。］

雪子、どうしたとか涙子さん、桂さまにも見せず、ひとり泣いてるのは？つねの病氣とはちがって、どうやら、むねに心配ことが出來た樣子。それにしても、したしいわたしに、なぜうちあけてはくれぬ、ちッとも？あゝ、心配こと！

［奥より、看護婦長。］

長。溢屋さん。

雪子。はい。

長。何にを、また、お考がへなされますか？

雪子。何にも考がへてませんわ。

長。わたしはよく知ッてます。

雪子。あなた、また、そんなことを！

長。赤木さんはねェ、あなた、よいおかた。

雪子。うそですよ、あなたまでがそんなことおッしゃッて。

長。そんなら、もう、これから、いひますまいねェ。—それにしても、まア、あなた、あの上田さんの御病氣、どうかしておあげなさッたらいゝでせう？

雪子。どうと申して、仕かたが御坐いません。休暇をもらッて、おとゝひ、出ましたとき冷えたか、さし込んで歸りまして、そのまゝ寐たッきりですから。

長。誰れかに見せたら、いゝでせう？

雪子。それが、なぜだか、ちッとも見せんで、人にも逢ふのがいやだといッて、泣いてばかり居ますから。

長。それは困まります。なぜお見せなさらぬ？

雪子。あれは隨分心經質ですから、何にか一とつこゝろでおもひ込むと、なかなか人のことも聽きません。たとへ自分はどうなッても、人にからだを見せないといひ張りまして。

長。しかし、何んとかしておあげなされば？

雪子。わたしも心配ですから、あした、おとッさんに賴み、うちいつれて行ッて、ゆッくり養生さすつもりですが。

長。おしたしいあなたですから、どうぞ、左樣なされてくださりませ、わたしまでがお氣の毒で。

雪子。ありがたう御坐ります。あねにかはり、わたしがお禮申します。

長。それでは、もう、おやすみなさりませ、あなたもけふは御非番で。

雪子。ありがたう御坐りました。

長。おやすみなさりませ。［看護婦長は入る。］

淨瑠理。「あと見おくッて溢屋雪子、さすがあねとも呼ぶ友の、月に對して人をこひ、人に向へば人をおそる、

あはれ涙子のちら〳〵、くだけて散れといはゞこそ！しほにゆられてゆるぐ身の紲まきのひもゝ解けかけて、あはたゞしげにはせ來たる。

〔奥より、上田涙子。〕

涙子。雪子さん！

雪子。えゝ、そのなりは？

涙子。あゝ、くやしい！〔うつ伏す。〕

雪子。まァ、そのなり。あなた、どうしたんですねェ？

涙子。くちにも何んにも、ちェえゝ！いへたとでャ御坐りません。

雪子。いはなけれャァ。それでも、わからないでせう？

涙子。はあゝ！

浄瑠璃。「わッと泣き出す涙子をば、じッとながめてなみだぐみ。

雪子。あなたは、まァ、よく氣をおしづめなさッて、それはどうしたとやら、どうぞ、はなしてください。

浄瑠璃。「いかにあさましの世とはいへ、かうした耻ぢは涙子のすがた、身をつくろッてすゝみより。

涙子。どうぞ、まァ、聽いて、澁屋さん、下さりませ、くやしい！何んといッていゝものやら、わたしャわかりません。

雪子。だッて、はなさなけれャァ、なほ更らわからないでせう？

涙子。そんなら、まァ、あなた、どうぞ聽いてくださりませ。耻づかしいとですが、あゝッ！あの、いま、宮城さん、わたしャ頼みもせんに、見てやらうとは入ッて來て、いゝてことはるのも聽かないで、無理にわたしの手を引き出して、まァ、あなた、脈見るまねしたり。まだそのうへ、わたしのむね見せよといはれたそのこわさに、からだもこゑも立ちませなんだ。をなごの身はかよわいもの、いつどんなとが起こらうも知れませんゆゑ、わたしはちッとも由斷せず、宮城さんが自分で見やうとするので、わたしャぢきに飛び起き、にげやうとしましたのに。にがすまいとあとから抱かへますから、ふりはなし〳〵、やうよで助かりました。

雪子。宮城さんが、まァ？

涙子。こんなとと人に聞かれましたら、どういたしませう、なさけ無い！

浄瑠璃。「せめてこの身がゆるされてわがものならば、井戸にでもうみへでも身を投げて、消えて入りたい、わすられたい！

をなごとして、これほど、世に、まァ、耻づかしいとは御座りません。

雪子。まァ、あなた、御病氣だのに、なさけ無い人といッたら。

涙子。あゝ、もう、人のこゝろ、わたしはこわくッて。

雪子。そんなら、あなたは、まァ、わたしにそれが卑恐だといッたを早やわすれましたか？

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

涙子。いゝえ、おぼへて居ますが、却ッて、わたしは、もう、何ともわすれたう御坐んす。

雪子。まァ、なぜ、そんな氣になッたでせう？

涙子。わたしは、もう、これから、誰れにももうあひません。

雪子。どうして？

涙子。どうしてゝ、そればかりはもう聽いてくださるな。

雪子。だッて、まァ、あなたは、そんなに急に？

涙子。あゝ、もう、——さう聽かれては、なほ更らかなしうなります。

雪子。それでも、あなた、世間は、宮城のやうなものばかりでは御坐いませんし、ねェ、あなた、また、桂さんのやうないいおかたも居らッしゃるに。

涙子。いえ、もう、誰れも、わたしは信じません。

雪子。えゝ？あなたは、まァ、そんなら、桂さまゝで？

涙子。あゝ、もう、わたしの身に、どなたも無いもので御坐ります。おや兄弟みな亡くなり、ひとりのこるこの身は、このまゝ死にうせてもいとひませぬわいなァ！

浄瑠理。「わッとまた泣くかゝさぎの渡たせる橋は天なりと、
人をいとひ身をかこつこゝろは知らず、しろたへの
雪子にうつるはら／＼なみだ。

雪子。あゝ、わたしまでかなしうなッて來ました。あなたは、まァ、わたしのたよッてるかたゞのに。

涙子。おうれしう存じますれど、わたしはもう無いものとおもふてくださりませ。

雪子。すれャあんまりな、まァ、どうして？假令どこへ御坐ッても、わたしャあなたと一所に居たう御坐んすものを。しかし、まァ、あなたがいまの御病氣、何んと申すも不從など、なほるまでは、どうぞ、まァ、わたしのうちへ——わたしャ父にたのみますから、——どうぞ、來てくださりませ。わたしャおそば近う看護したう御坐んすわいなァ！〔泣き伏す。〕

浄瑠理。「そのお言葉はありがたく、千代にちかひてちゝはゝ
にたぐへてわすれ申さねど、むねにいはれぬこのか
なしみ。

涙子。たとへ病氣はなほッても、わたしはあま同然の身。どうぞ、わたしにかまはず、よくつとめてくださりませ。

雪子。〔頭をあげる。〕すれャ、あま同然とおッしゃるのは？

涙子。いま更らでないあまの身、人に見られますのも、もういやでたまりません。

雪子。すれャ、あなたがよめ入りせぬといつもおッしゃるのは、なにか深かいわけがありませうが、それはまた聽くといたしても、まァ、さしあたり、御病氣のなほるまでは、わたしャ父にたのみますから、どうぞ、わたしのうちへ來てくださりませ。

涙子。はッあ！御親切なそのおこと葉、母がまだこの世に御坐るやうで。そんなら、御厄介になりまするぞ。

雪子。どうぞ、さうなさッてください。わたしもおそばに居られて、うれしう御坐んす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

涙子。それでも、まヿにすみませんねェ？

雪子。いゝえ、どうして？ あなたはわたしの姉さん、いまにはじまったヿでゃ御坐いません。しかし、まァ、あなたはなぜ桂さんお見切りなさッたのでせう？

浄瑠理。「と問はれて涙子のむねのうち、人こそ知らね、しら糸のこゝろぼそさは血のすぢをあかさうものか、あかそまい、この親切も無にされぬ、思案さだめて雪子に向かひ。

涙子。どうぞ、澁屋さん、許るしてくださりませ、いまゝでかくしましたつみ。實は、わたしは血のすぢけがれて居りますもの。

雪子。えゝッ！

涙子。びッくりなさるも、御もッともで御坐ります。これを知らんで、これまで、まじはッてくださッた御親切、あねやいもとのやうにうれしうおもふて居ましたを。——さぞ、あなたはおいやにおなりなさッたでせう？

雪子。あゝ、何んで、まァ、そんなヿが。一旦、兄弟とちかうたもの、何んであなたがそんなヿを？

涙子。あゝッ！このからだにけがれあれば、こゝろまでがこのやうにくさるものか、なさけ無い！

浄瑠理。「何んのつみとがある爲めに、こひしき人をうたがひのうみに見すてゝ、われもまた、うらみの舟にただよふぞ！

これ澁屋さん、〔手を合はす〕あなたがたゞひとりのおちから！

雪子。あゝ、勿體ない、あなたは！〔涙子にすがる。〕わたしゃ決してこのヿ人にゃはなしません。どうぞ、わたしを、こののちも、いもとゝおもふてください。

浄瑠理。「互にすがりすがられて、乙女ごゝろのつたかづら。根は異なれどおひ立ちて、姉をちから、いもとをちから。まつはり解けぬぞあはれなり。——涙子はやう〱なみだをぬぐひ。

涙子。しかし、お氣の毒なは桂さまの御免職。

雪子。えゝ？

涙子。それも、宮城がさせたので御坐いませう。いまも、わたしにはなしました。

雪子。しても、まァ、にくい宮城！

涙子。それに、桂さまには、おいと子でいひ名づけが御坐るとのヿ。

雪子。えゝ、ほんと？

涙子。ほんとで御坐いませうとも。それを、まァ、お見切りなさらうとあそばしたのも、つみはみなわたしがあるゆゑ。どうぞ、あなたは、これから、わたしのヿはなしてくださりますな。

雪子。そんなら、桂さまには、もう、お目にかゝらぬおつもりですか？

涙子。このけがれた、賤しいわたしが、どう、まァ、再たびあはれませう？ ——おもへばこないだのゆめ、まさゆ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

めであつたか！

雪子。　わたしもまたかなしうなりましたわいな。

淨瑠理。「折から、けふの宿直の山口進いで來たる、さまも無禮の意ばりづら。

山口。　宮城君がこれを。

浪子。　わたくしにですか？

山口。　左樣。

浪子。　何んで御坐ります、それは？

山口。　くすりでせう。

浪子。　えゝ、誰れがそんなもの賴みました？

山口。　誰れか知らん、まア、宮城にたづねなさい。

浪子。　そんなら、こちらで入りませんから。

雪子。　そんなことを？

浪子。　どうぞ、あなた、お返いしくださりませ。

山口。　なせです？

雪子。　いえ〳〵、わたしがうけ取ります。

山口。　それでは、たしかに。

雪子。〔うけ取ッて〕はい、おうけ取り申しました。〔山口入る。〕

浪子。　えゝ、わたしはそんなくすり飮みませんよ。

雪子。　まア、なぜです？

浪子。　なぜッて、けがれて居ます。

雪子。　けがれて？なぜ？なぜ？まア、そんなにいはなくッてもよろしい、おくすりには、何にもつみは御坐いませんわ。

浪子。　うけたがわるいのです。

雪子。　そんなら、返いして來ます、—あなたの爲めなんだのに。

浪子。　なに、よろしい、わざ〳〵返いすにはおよびません。

雪子。　それ、御覽なさい。

道子。　ちョいと、見せてください。

淨瑠理。「くすりを取ッて、看護婦のなれし浪子はつく〴〵ながめ。

浪子。　何んだか變なくすり！

雪子。　どれ？〔のぞく〕何にも變でありませんわ。

浪子。　その水はいゝの？

雪子。　あい、よろしい。〔机上の瓶を取ッてやる。〕

淨瑠理。「雪子はひとえにやまひをばいやさんとしてつぎ入るゝ、水にうかびしくすりこそ浪子がすゑの不幸なりけり。

雪子。　それでおやすみなさい、わたしゃぢきに行きますから。

浪子。　そんなら、待ッて居ますぞ。〔立つ。〕

　　　おもへばはか無い〔水のかしら〕

兩人。　身のうへじゃな。

〔浪子うらみの情よろしく、道具まはる。〕

(三)溢屋本宅玄關の塲。

〔本舞台溢屋やしきのうち、玄關先の躰。男女二人掃除して居る。〕

男。　さア〳〵、けふは、もう、これでおことしョ。おかみさんも、もう、おかッしゃれ。每日、朝から、くさぬきは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

《前文に次ぐ》

大體などでゃないに、十錢や十五錢儲けて、飲んでしまへば、かすほども殘こらる。

小野鵞堂編書
●女子消息 文のかきふり　實價金三拾六錢　郵税金六錢

同
●高等女子文かきふり　實價金三拾二錢　郵税金六錢

竹越竹代女史著
●婦人立志篇　實價金貳拾錢　郵税金貳錢

松村介石君著
●婦人のかゞみ　定價金廿五錢　郵税金四錢

女子高等師範學校長 華族女學校長 細川潤次郎先生序文
女子高等師範學校助教諭 共立女子職業學校講師 寒澤振作君著
●家政の栞　全一冊　洋装大判二百頁　正價金廿錢　郵税金六錢

同君著
●婦人のてかゝみ　定價金廿錢　郵税金六錢

東京華族女學校學監下田歌子先生序
全 囑托教授關根正直先生編輯
全 教授坂正臣先生編輯幷書
●筆のゆきかひ　全二冊　一冊 正價金廿八錢　郵税金六錢宛

花の家胡蝶大人著
●年中總菜の仕方（第拾版）　實價金廿五錢　郵税金六錢

坪谷善四郎君著
●閨秀錦囊 日本女禮式（密畫入）（第拾版）　全　正價五拾錢　郵税拾貳錢

坪谷善四郎君著
●家政整理法（第四版）　全　正價拾五錢　郵税八錢

飯島半十郎君著
●家事經濟書（第七版）　全　正價拾貳錢　郵税四錢

文學士濱田健次郎先生校閲　濱本顯義君著
●婦女教育 明治姫鏡　全　正價五拾錢　郵税八錢

陸軍々醫總監松本順君題辭　堀誠太郎君譯
●婦女性理一代鑑（第三版）　全　正價三拾錢　郵税拾錢

醫學士中村正道君著
●小兒養育法　全　正價拾錢　郵税四錢

須永金三郎君著
●婦女手藝法（密圖入）（第三版）　全　正價拾五錢　郵税六錢

第三高等中學校教授醫學士高橋金一郎君著
●通俗看病法　全　正價拾五錢　郵税六錢

刈城森種太郎君著
●衛生美身術　全　正價拾錢　郵税四錢

賣捌所
東京神田表神保町六番地
女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新撰 **大日本全圖** 附海陸道郡界電信燈臺光達鐵道里程 正價金二拾錢 郵稅四錢

新撰明確 **日清韓三國圖** 附北京京城大同江口威海衛等ノ要圖 正價金拾錢 郵稅金二錢

入道色分 **朝鮮國明細全圖** 幷附近航海線路 定價金八錢 郵稅金二錢

日清戰爭實記 毎編寫眞銅版畫入 毎月三回 一册金八錢 郵稅金壹錢五厘 但シ第一巻ハ金四錢

足立栗園編著 **朝鮮志** 全 正價金拾錢 郵稅金二錢

如囚居士著 **朝鮮雜記** 全 正價金拾八錢 郵稅金四錢

日清韓 **新三國志** 朝鮮、支那諸名士詳傳並肖像挿入 全 正價金拾五錢 郵稅金四錢

山口昜譯述 **懲毖錄** 朝鮮特命全權公使從三位大鳥圭介君校閱、鈴木信仁君編著 全 正價金廿五錢 郵稅金四錢

朝鮮洪奭鉉君著 **朝鮮紀聞** 全 正價金廿五錢 郵稅金六錢

新撰朝鮮會話 全 正價金八錢 郵稅金二錢

佐々木信綱君作 **支那征伐の歌** 全 正價金七錢 郵稅金二錢

賣捌所 女學雜誌社書店

評論第貳拾八號要目

朝鮮開革案 政閣。經濟及び兵備警察。教育、後藤伯。蒼海老伯の五華に分ちて。朝鮮の開革に係はる吾黨の所考ヶ發表す。知友、冀はくは、一顧を垂よ **朝鮮の傳道** 日本人の海外傳道大ひに興らざる可らず。此の傳道先づ朝鮮に着手せざる可らず。而して朝鮮傳道の方案抑そも何如ん。玆に則はち吾黨の所見を述ぶ。**はつ秋のたより** 何等、幽玄。何等、風流。何等、寥寂。何等、獨吟。此の文、多恨の才子が初秋の感慨を露はす。**あまごひ** 老俠の人、赤誠を献げて、天これに感通す。小說の如くして、小說にあらず。たゞ輕淺の人に於て即はち小說たらん耳。**日英新條約を讀む** 短文、少語、然れども方今の時論に一の益する所ろなからずや。吾黨時事の所見、不幸にして輿情と異なるもの多し。

女學雜誌前號要目

外國宣教師論 外國宣教師論漸やく喧囂なり。吾輩は甚はだ輿論と遊ぶ。世人何故に外國宣教師を責むる如此く酷なるや。條約改正の意義は何處にありや。排ミッションは寧ろ流行のみ壯語のみ、何のエラキとかあらん。吾輩、今に方ては、反つて輿論を嫌ふ。**第一回女子夏季學校** 其景況、其報告、其決議、つくして玆に明白なり。**家政試問** 林學士齋藤音作君、女子夏季學校の來會者に、家政上の問題二案を供出す、答論數十、尤さも趣むきあり、甚はだ品多し、女學生の實況を見めすと如此きものは稀なり。**畫の趣味** 無光子が、畫の趣味の說、遂に佳境に入つて、神彩陸離、紙上、墨動き、美神舞ふのこゝちす。

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）前金十錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に雜誌十部注文を要し以上半部增さ定む。右

本誌代價

册數	定價前金	市外定價郵稅共
一册	金六錢	金六錢五厘
十册	金五十八錢	金六十三錢
廿六册（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二册（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

發行所 東京府北豊島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治 印刷人 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY